備陽史探訪

第 239 号
発　行
備陽史探訪の会
福山市多治米町 5-19-7
TEL.070-1074-9617

備陽史探訪の会の目的
備後を中心とした
地域の歴史を研究し、
愛郷の精神を涵養する。
（会則第1章第2条より）

『大和田重清日記』に見える「セナ田」について

会長　田口義之

はじめに

江戸時代から明治時代、山陽鉄道が開通するまで、陸上交通の要は「西国街道（または中国道）」とよばれた幹線道路であったことは間違いないが、この街道がいつ頃から、今日のルートになったのかは諸説あって定かではない。

西国街道は、一般的に「旧山陽道」と呼ばれるように、古代の山陽道を踏襲した道であったが、各所で古代のルートからはずれ沿岸部を通るようになったことから、江戸時代の呼称のように西国街道、或いは西国往還と呼ぶのが正しい。特に、備後南部ではルートの変更が著しく、古代山陽道のルートは近世に「石州街道」として一部使われた外は使われなくなり、備後国分寺の前から南に折れ、神辺宿を経由するルートとなった。

西国街道変遷図

これは、鎌倉時代以来、内海水運の発達によって、沿岸部の鞆・尾道が港町として繁栄し、陸路もそれに伴って尾道を経由する現在のルートになったものである。このルートの変更を神辺城の築城を契機とする説もあったが、神辺城が備後南部の中心的な城郭として機能したのは、城下を西国街道が通っていたためと考えられ、ルートの変更が先で、城の築城が後とするのが正しい。では、このルートの変更が何時行われたのかが問題となるが、南北朝時代今川了俊の「道ゆきぶり」に矢掛から尾道に行った様子が描かれていることから、この頃には沿岸部を通るルートになっていたと考えられる。しかし、その具体的なルートについては明らかではない。

特に、中世末まで神辺平野の南部に「穴の海」が存在したとすると(1)、現在の神辺平野の南縁を通って芦田川を渡り、郷分・山手・赤坂を通るルートは洪水などによって度々交通困難に見舞われたと考えられ、ルートとして固定されていたとは考えがたい。それよりも地形的に、後に「神辺街道」と呼ばれた神辺から千田に入り、千田大峠を越えて吉津に出て、そこから本庄で芦田川を渡り、山手から赤坂・今津のルートを通ったとする方が合理的である。

16世紀後半に入ると、西国街道を通った旅行者や大名の記録が増

目　次

『大和田重清日記』に見える「セナ田」について……（会長　田口義之）1
調査報告
中世石造物の調査報告…（篠原芳秀）3
研究レポート
火縄銃の威力を考える Ⅱ
―距離と弾丸の威力との関係―……（瀬良泰三）9
ワンショットレポート……11
研究レポート
一乗山城跡について……（杉本憲宏）12
ワンショットレポート……14
読者ノート
福山医療センターの沿革……（種本実）15
読者ノート
毛利元就と出雲の尼子氏・塩冶氏の父子ゲンカ……（川内和夫）17
田口義之の備後の古墳30選（4）双子山古墳……19
事務局日誌

現在の会員数
226名

会員数は12月上旬現在の数字です。その後の増減があるかもしれません。（いっちゃん）